

I 体験活動と学びの過程

1. 体験活動とは

現実の世界や生活の世界と体全体を使って実際に関わっていくことを「体験」といい、こうした体験によって外界の事物や事象を学びとっていく学習方法や形態を「体験学習」あるいは「体験活動」といつている。

「体全体」を使うというのは、私たちが体に身につけている感覚器官を使って、外界と交わり、学びとっていくことをいう。つまり「視」「聴」「味」「嗅」「触」といった感覚器官を通して「知る」ことをいう。感覚的認識、感性的認識ともいわれる。

体験には、人と対象との関わり方の違いによって、大きく三つのものがある。直接、対象に体で触れたり、関わっていく体験を「直接体験」という。写真やビデオなどを通して見たり聞いたりする体験を「間接体験」といつている。さらに模型やシミュレーションなどを通して関わることを「疑似体験」といつている。情報化社会の進展の中で、間接体験や疑似体験が飛躍的に増大する中で、直接体験は他方で衰退してきた。本書で扱う体験とは、この直接体験をめぐってである。

2. 学力の基層・土台としての体験活動

「体験活動」あるいは「体験学習」は、子どもの学びの過程（認識の過程）においては、大きく二つの場面で重要となる。今までわからなかったことがわかるようになり、今までできなかったことができるようになるという「学びの過程」（認識の過程）は、ペスタロッチ以来、大きく次のように描かれてきた。

体験（直観，感覚的認識）→概念化（思考・知性）→実践（行動化，活用・応用）

まず、学びの過程の第一段階にくるのが体験である。身の回りのいろいろの事物・事象を体で知る。体に身につけている感覚器官を通して知る。ここから学びが出発する。もちろん、高校生ぐらいになると、抽象的な記号（シンボル）の操作によって認識を深めることができるようになり、大人には必ずしもこの図式は当てはまらないこともあるが、小・中学生には、この過程がよく当てはまる。

この体験を理屈に置き換えるのが第二段階である。例えば、トンボには羽が4枚あることは見て学ぶ。そこで、「なぜ4枚だろう。2枚では都合が悪いのだろうか」と、理屈に置き換えようとする。概念化をはかる。深くものごとを考える。科学的、合理的に捉えようとする。この役割を果たすのが、学校であり、そこで得た知識や技能、物の見方、考え方を「学力」と称している。

つまり、学力の基層、土台として、第一段階の体験活動があるわけである。例えて言えば、体験活動という富士山の裾野が広ければ広いほど、概念、知識、思考といった頂（学力）は高くなるという関係になる。体験が学力を支えているわけである。もちろん、ここでいう学力は、単に教科に限ってのことではない。道徳性や社会性といった「心」や「人

間関係」等、広く含めてのことである。

3. 知の活用・実践化としての体験活動

知識や技能さらには考える力といったものを、頭に貯えることが学びの最終目標ではない。「何のために学ぶのか」が問われる。学びの最終目標は、知識や技能や考える力といったものを駆使して、「今よりもっと豊かな世の中にしよう」「自分自身をもっと高めよう」とするところにある。これが、学びの過程の第三段階であり、最終段階である。学校で学んだ知識や技能、物の見方や考え方、迫り方は、再び現実の世界、生活の世界と結びつき、生かされ、その改善や向上に役立てられてはじめて意味をもつ。この第三段階を「実践化」とか「知の活用・応用化」とか「行動化」と称されている。子どもの側に視点をおけば、この複雑で難しい世の中を、自分の力で自立し世渡りができるための「生きる力」ということになる。

この知識や技能や考える力といったものを現実の世界と結びつけ、活用する際に、その方法として「体験学習」が不可欠であり、もう一つ「問題解決学習」を必要とする。自ら実践してはじめて生きる力は身につくからである。頭の中であれこれ考えをめぐらすだけでは、実践力、知の活用力を学び取ることはできない。体を使って、実際にやってみなければならぬ。

この生きる力を育む上で「一層重視される教育活動」として学校の教育課程上に設定されたのが、総合的な学習の時間である。総合的な学習の時間の学習方法の原理として、問題解決的学習と並んで体験的学習を提示しているのは、この第三段階の学びのために設定されているからに他ならない。

4. 体験の喪失と学びの過程の歪み

学校教育の上で、体験の問題が登場するのは、昭和 52（1977）年改訂の学習指導要領からである。以来 30 年、「体験重視」はますます声高に強調されるに至っている。2007 年度改定予定の学習指導要領においても、改訂の重要な柱の一つとして「体験重視」があげられている。

そこには、子どもの体験の喪失という状況がある。東京オリンピック（1964）年以降、高度経済成長期に、子どもの生活の在り方が激変した。特に 1970 年前後の昭和 40 年代においてであった。一言で言えば、それまでの「戸外での群れとしての遊び」から「家の中での一人遊び」と、遊びの形態が変わった。その戸外での遊びの中に「体験」があったのであるが、家の中に巣ごもりするにつれて、体験が失われることになった。

家の中になぜ巣ごもりすることになったか。その理由はいくつもある。①少子化が始まり（その転回点が 1968 年）、子ども部屋を持つことができるようになった。②一人遊びの玩具が登場した。その嚆矢をなすのがリカちゃん人形（1968 年）。③缶入りの飲み物とスナック菓子の登場により一日中、部屋の中で生活できるようになった。④マイカーブームで

通路の遊び場が消えた、等々である。

結果として、それまでの直接体験が衰退した。そのとき、教師から次のような嘆きが洩れてきた。「教えても教えても学んでくれない。学んだと思っても、すぐ忘れてしまう」。吸い取り紙みたいに、吸いとってくれなくなったのである。体験を失ったとき、学びは変質し、歪んでしまった。具体物を知らないために、いきなり第二段階の「理屈」から学び始める。学びは抽象化し、機械的暗記主義に頼らざるをえない。だが、それは身につかず、時間とともにすぐに忘れてしまう（学力の剥落現象）。

さらに、単に機械的に暗記した知識は、使いものにならない。現実世界と結びつかなくなり、実践力、活用力、応用力を欠き、「学校で学んだものは、世の中で役に立たない」と、当たり前のように言われることとなった。それだけに、体験回復をめぐっての必死の努力が、今日まで続けられてきたわけである。

Ⅱ 体験活動と確かな学力

1. いろいろな体験活動

体験活動は、子どもの家庭や地域社会での日常生活の中に存在する。野外での学校外教育においても、主要な学習方法となっている。学校教育においても、各教科はもとより、生活科、特別活動、総合的な学習時間等において、主要な学習になっている。このように、体験活動は広範囲に広がっているが、その主要なものをあげれば次のようになる。

- ・自然体験　―　生き物体験、物理的体験、天文気象、岩石、河川など
- ・文化体験　―　生活技能、ものづくり、産業体験（農、林、漁業など）、地理歴史的体験、言語、伝統文化、伝承芸能、異文化体験、食文化など
- ・社会体験　―　基本的生活習慣、人間関係（共生）、社会規範、就業・職場体験、社会参画・奉仕体験、集団宿泊体験など
- ・身体的体験　―　基礎体力、基本的運動能力（歩、走、跳、登、投など）、悩み・不安、衛生習慣、危険予知、健康安全など
- ・心の体験　―　感動体験、失敗・挫折体験、成功・成就体験、耐性、基本的モラル（善悪の判断）、自己理解・自尊感情など

もちろんこれらは、体験活動'の内容と活動の形態とを区分せずに並べたもので、実際には、入り組んでいる。栽培活動（生き物体験）をする中で、地域の人の指導を受け（人間関係、交流体験）、その花の美しさに感動し、台風で倒れ収穫できない（挫折体験）といった具合にである。

2. 集団宿泊体験と活動内容

全く同じことだが集団宿泊体験活動についてもいえる。集団宿泊体験活動というのは、

学校や学級や少年団などの「集団」を単位とした「宿泊」を通した体験活動という活動の形態を示すもので、そこでどんな活動をするかという活動内容については、何ら示していない。逆に言えば、集団宿泊中、どんな活動を用意するかは、全く自由であり、考え方しだいである。

例えば、植物観察、星空観察、焼き板工作、林業体験、学校間交流、清掃ボランティア、登山、共同生活等々を組み込む。そこに心の体験も生起する。つまり、どんな活動をカリキュラム（スケジュール）として編成するかである。それを決めるのは、「今、目の前の子どもたちにどんな体験を必要としているか」という、実態である。子どもとじっくり相談して必要な活動内容を決定しなければならない。もっといえば、この目の前の子どもをどんな子どもに育てるか、どんな力を育むかという「するどいねらい」こそが、教育課程編成の鍵を握っている。

3. 体験活動と確かな学力

前に述べたように、体験活動は「なぜ、どうしてこうなんだろう」「どうしたらいいのだろう」という「問いかけ」を通して、「こうなんだ」「こう考えたらいい」「こうしたらいい」という知識、技能、考え方とつながり、「確かな学力」へと実を結ぶ。この体験活動から確かな学力人の筋道を、集団宿泊体験を軸にみていくと、次のような側面をあげることができよう。

（１）ことばとコミュニケーション

集団生活の中で、人と人をつなぐのは言葉でありコミュニケーションである。「おはよう、ありがとう、ごめんなさい」というあいさつがまず最低限求められる。「いただきます、ごちそうさま」もそうである。こうした日常の生活言語が不可欠になる。

さらに、集団宿泊をするには、皆で相談して行動しなければならない。話し合うことが重要になる。聞く、話す、話し合うが生活の中で終始求められる。調べたり、学んだことは、ノートに記録としてまとめなければならない。書くことも常に必要になる。

豊かな体験は、心を満たす。表現しようとする。誰かに話したい。話したい内容が貯まり、コミュニケーションが活発となる。にぎやかになる。ある小学校の6年女子が、それまでほとんどしゃべらず緘黙児扱いされていたのが、集団宿泊体験活動の最中、突然、大きな声でしゃべり始めたそうである。周囲の子どもは目を丸くし、思わず皆、拍手をしたそうである。心が満たされれば、青葉はあふれ出してくる。

（２）心の教育

集団生活では、規則正しい生活が求められる。自制しなければならない。わがままは許されない。仲間のもとより、大人、近隣の人とのあいさつができなければならない。礼儀やマナーが求められる。食事にはじまり生活全般を礼儀やマナーが貫いている。

つらいときは耐えなければならない。挫折や失敗を乗り越えなければならない。強い心（耐性）に生まれ変わる。ねばりがついてくる。喜怒哀楽と、心が動く。花の美しさ、生

き物の不思議さ、数えきれない星の数に心が動き、感動する。心が豊かになる。

(3) 人間関係、集団的能力

集団生活では、いやでも人と人との関わりは深く、複雑になる。友だちとの協力、支え合う関係も体験すれば、争いやいさかいも起こる。集団生活であるため、そこから逃げ出すこともできない。話し合い、問題を解決し、支え合い、助け合う関係を見いだしていかなければならない。こうして、人と人との関係は深まっていく。

見知らぬ人との関係も広がり深まる。民宿に泊まれば、そこに新たな交流が深まる。学校間交流、地域の人との交流と、共に生きる輪が広がる。その交流の中に、人と人とのつき合い方を学び、社会性が育っていく。

(4) 心身の健康と安全な生活

家を離れての集団生活ということになると、心身の健康にはまず自分で注意し、守らなければならない。起床・就寝、入浴、着替え、排便、歯みがき等の衛生習慣はもとより、食事にも気をつける必要がある。好き勝手におやつが手に入るわけではない。見知らぬ土地で生活する場合、どんな危険が待ちかまえているかわからない。安全にも気をつけねばならない。

こうした基本的な生活の仕方はもとより、より積極的に心身の健康を高める絶好の機会でもある。歩く、走る、座る、跳ぶ、投げる、登るといった自分自身の体を動かすことによって、生活は維持される。登山やハイキングはその最たるものである。おいしい空気の中で体を動かすことによって、心もリフレッシュされ、健康になる。

(5) 生活の技能

家でのお手伝いも少なくなり、今や死語化しつつある中、集団宿泊生活の中では自らの手の技能に頼る部分が多い。3日間ぐらいまでは着替えを持参できるが、それ以上になると持参できない。集団生活の中で折を見て、洗濯しなければならない。食材を求めて、決められた範囲内での買い物体験も興味深い。

食事をつくる体験もある。かまどをつくり、薪を集め、調理をし、食べ、洗うとなれば2～3時間はかかる。食べるという人間生活の基本がいかにも大変なものであるかを実感する。周囲の木や竹など、いろいろの道具を使ってものづくり、細工に取り組む。手の技術を実感するとともに、つくることの喜びを体感する。

(6) 自然を見る眼

特に、農山漁村といった場所における集団宿泊体験においては、自然環境が豊かであり、子どもの驚きや発見が生まれ、自然を守ろうという心が強まってくる。たとえば、「青」や「緑」といっても、よくみるとその色の多様、多彩さに驚く子どももいる。星空観察を都会育ちの子どもがすると、衝撃的な感動をもたらす。「星の数ほどある」という言葉は、「数えられる数」ではなく「数えきれない数」だと、実感する。

こうして、まず自然が好きになり、ついで自然を知ろうと見る眼が鋭くなり、さらに自然の大事さを知り、自然を守ろうと自然保護の精神が芽生えてくる。また、一本の木や草

から、山全体、天空へと視野が広がっていく。

（７）社会を見る眼

集団宿泊体験は、自分の生まれた地域よりもそれとは異なる遠く離れた地域で展開されることが多い。このことは、自分の生活している地域と集団宿泊している地域の違いに気づくことになり、自ずから社会を見る眼を育てることとなる。さらには、その違いに着目して体験活動を用意することが、重要な意味をもつことにもなる。

産業体験（農、林、漁業など）はその最たるもので、そこでの体験活動を通して、人々の暮らしやその地域社会の仕組みを知り、「こうあってほしい」という主張や提案が生まれてくる。伝統的な文化や伝承行事や芸能にふれ、「伝統」や「郷土」というものを実感し、そのことの生活に占める意義や大事さを学ぶことにもつながっていく。

（８）自分を見る眼

社会を見る眼は、逆にそれを見ている自分を見る眼へと反転する。体験を通して、もっ自分で努力し、克服しなければならない点を見つけ出し、努力しようとする。また、自分の持っている興味・関心や長所に気づき、新たな課題や対象に積極的に挑戦しようとする。

その結果、一時の成就感、満足感あるいは自惚れからではなく、「自分でもやれる、自分も捨てたものではない」といういい意味での自分への誇り、自己有用感、自尊感情を生み出すことになる。「この世の中に生まれてきてよかった」という生きることへの積極的な姿勢、自己のさらなる確立、生き方在り方の探求の基盤をつくることにもなってくる。しっかりした「自分」がつくられてくる。

４．体験活動の形態と過程

（１）体験活動の形態

体験活動の形態としては、大きく「集中方式」と「継続方式」との二つがある。もちろん、その中間方式もある。集中方式というのは、数日間、集中して体験活動を行うものである。集団宿泊体験活動や就業・職場体験活動は、その代表例である。それに対して、毎週、継続しながら長期にわたって活動を積み重ねていくのが継続方式である。栽培活動などの農業体験学習などは、その代表例である。どちらが優れているかというものでなく、体験の活動内容によって、どちらをとるかがきまってくる。

集中方式の場合、どれくらいの期間を集中して活動させたらよいかが問題になってくる。今のところ断定できる状況にはないが、経験的には「３日過ぎれば本物」のいい方が、一般に受け入れられている。集団宿泊体験活動においても職場体験活動においても、全く同じことが言われている。

その理由としては、２～３日間は、生活の仕方やきまり、仕組み、礼儀やあいさつの仕方など、活動の基本を覚えこみ、身につける期間で、それを過ぎてはじめて、いさかいが生じてその解決に自分たちで協力したり、活動を工夫したり相談したりと、「生活をつくり出す」活動へとつながっていくため、とされている。したがって「長期」集団宿泊体験活

動というとき、その期間は少なくとも「4泊5日」以上と受けとめられている。

(2) 活動の過程

一般に、体験活動の過程は、事前学習－体験活動－事後学習の順に進められる。いきなり体験活動をまず行うこともないではないが、一般的ではない。すなわち、まず体験活動のアウトラインを知り、子どもの理解を図り、子どもの要求や期待を受けとめながら、スケジュール（活動計画）を作る。しおりの作成など、その準備に子どもも主体的に参加する中で、活動への意欲を高め、協力関係を深める。

実際の体験活動が終わったら、活動を振り返り、価値付け、意味付ける事後学習をしっかりと行う。この事後学習が欠けたり、不十分だと、「楽しかった。つらかった。おいしかった」という感想で終わり、「これからの学習や生活、ひいては生き方の糧として、何を学びとったか、引き出したか」という最も核心となる部分が失われ、育たない。「体験あれど学びなし」になってしまう。

Ⅲ 体験活動と成長の過程

1. 小学校低学年の体験活動

幼児期から小学校低学年は、「遊び」から「生活科」への移行の時期で、「学びの芽生え」の時期といえる。感性的で、自分と対象とが一体化する。雨に濡れているチューリップを見て、「チューリップさん、かわいそう」と赤い傘を差しかけたまま、動けず、泣き出すといった行動をとる。しかし、こうした「しなやかな感性」こそが、身の回りのいろいろのことへの「気づき」を生み出す出発点である。

この「気づき」は、「関わり」を促す。花を育てたり、動物を飼育し世話をしたりと、自分の生活の中に栽培活動や飼育活動などがしっかりと取り込まれ、つながりをもってくる。人との関わりもそうであり、学校への登下校をはじめ、いつも出会う近隣の人との関わりが生まれ、安定した生活空間が生まれてくる。

周囲との関わりが繰り返される中で、「おや、なぜ、どうして」と疑問や問いが生まれてくる。つまり、物事の本質に迫る気づきが生じてくる。例えば、チャボの飼育を始めたばかりの児童は、チャボの全体像をばくぜんと描く。しかし、飼育が続いていくと、トサカはどうなっているのだろう、足の裏はどうなっているのだろうと、自分（人間）との違いに着目し、観察を深め、問いを発しつつけていく。気づきは、問いを媒介に理解へと深まっていく。そのことをまた言葉で言い表そうとする。絵で表現したり、言葉でまとめ発表したりと、言葉と認識の力がついてくる。体験から概念へ、感性から知識へと、常識が深まってくる。

2. 小学校中・高学年の体験活動

中央教育審議会の答申（2008年1月）では、小学校段階の発達の特徴として、「小学校に

においては、学年が上がるにつれて、自分のことも距離をもってとらえられるようになることから、自分との対象とのかかわりが新たな意味をもつ」とし、体験活動としては「自己が明確になり、自覚されるようになる小学校の時期においては、自然の偉大さや美しさに出会ったり、身近な学校の仲間とのかかわりを深めたりする自然の中での集団宿泊活動」を重点的に推進することを求めている。

つまり、自分と自分、自分と仲間や他の人々、自分と社会、体験と教科学習、体験活動の学習の振り返り等々と、低学年のように一体化し、投入していくのではなく、一定の距離や間隔をもって両者の関わりや関係を見てとれるようになり、物事を対象化して冷静に分析したり、理解できるようになる。それだけに、より知的な認識が深まる。

例えば、小学校高学年になると、「自分を見るもう一人の自分」が誕生し（メタ認知）自分の行動がこれでよかったか、どう振る舞うべきだったかを冷静に分析し、考えるようになる。そこに悩みや不安も生まれてくる。また体験したことをこれまで教科等で学んだ知的枠組の中に位置づけ、理解しようとし、うまく説明できないと新しい知的枠組を再構成しようとする。また人との関わりにおいては、相手は自分をどう見ているのだろうと、相手の立場に立って考えることができるようになり、おもしろいやりが生まれてくる。

3. 中学生、高校生の体験活動

前述した「審議のまとめ」では、中学生の発達の特徴として、「中学校になると、未熟ながらも大人に近い心身の力をもつようになり、大人の社会とかかわる中で、大人もそれぞれ自分の世界をもちつつ、社会で責任を果たしていることへの気付きへと広がっていく」とし、体験活動としては「大人が社会で責任を果たしていることに気付き、進路を自分の問題として考え始める中学校の時期においては、職場での体験を通して社会の在り方を垣間見ることにより勤労観・職業観をはぐくむ職場体験活動」を重点的に推進することを求めている。

また高校生の発達の特徴としては、「高校生になると、思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになり、自分は大人の社会でどのように生きるかという課題に出会う」とし、体験活動としては「自分と他者や社会との関係について考えを深める高等学校の時期においては、人に尽くしたり社会に役立つことのやりがいを感じることで、自分の将来展望や社会における自分の役割について考えを深めることが期待できる奉仕体験活動や就業体験活動」を重点的に推進することを求めている。

つまり、中学生においては、大人社会に参加することにより、一定の役割や責任を果たすことの意義を体験的に学ぶという「社会を見る眼」を育てるとともに、その大人社会に参加していく自分の在り方生き方を見つめるという「自分を見る眼」をはぐくんでいくことに焦点がおかれる。高校生になると、大人社会の入口にある。社会貢献活動が主体になり、自ら地域の社会づくり、活性化に貢献化し、豊かな町づくりに主体的に関わっていくことに焦点がおかれる。学んだ知識や技能を生かし、自分の力を伸ばし、挑戦していく。そうした中で、自分への誇りと生きることへの自信を獲得していくことが望まれる。

4. 体験活動と生きる力

社会が激しく変化し、複雑化し、その激流に立ち、生き抜くことには相当の困難が伴ってくる。この社会の入口に立って、多くの子どもたちは「こんなつらい世の中、生まれてこなければよかった」と、自信と意欲を失いかけている者も多い。それだけに「困難にめげず、世の中を生き抜く力」を育てたい。この困難な世の中を、何とか自分の力で立ち、世渡りできる一人前の子どもに育てたい。

そのためには、世の中を避けて自分の部屋に巣ごもりするのではなく、また現実の世界から遊離した抽象的な学校の習いごとに入入するのでもなく、現実の世の中と正対し、体ごとどっぷりつかって、現実の世界に挑戦し、自立し、生きる力を身につけてほしい。そのことがまた、自分を確立することにもなり、学校の学習を生き返らせ、身についた力となっていく。つまり、体験活動は、足腰の強い「生きる力」をはぐくむことにその到達目標がおかれている。小学校の「気づき」にはじまり、高校の「社会貢献」に至る過程は、その「生きる力」を獲得していく過程に他ならない。

この生きる力は、大きく3つの面からとらえられよう。一つは、「自分を生かし責任ある行動力」をどう育てるかである。自分が自分であることの誇り、主体的なしっかりした自己の確立、責任ある行動力、こうしたものをどう育てるかである。

第二は、人間は社会的動物であり、一人では生きてゆけない。仲間との支え合い、助け合い、高め合い、知恵を出し合ってよりよい生活をつくり出していかねばならない。そこに「他者と関わり、共に生きる力」の育成、人間関係形成力の今日的意義がある。

第三は、「社会を生き、自立する力」である。こんな地球環境にしたのも、我々人間である。その環境を取り戻すのもまた我々である。現実の社会と向き合い、働きかけ、つくり出すという体を張った活動の中から、よりよい社会が生み出される。そのような社会と向き合い、自立した力を備えなければならない。

(参考文献)

- 文部科学省初等中等教育局『体験活動事例集』ぎょうせい 2002 年
児島邦宏『確かな力をはぐくむ学校力』ぎょうせい 2007 年
茅野敏英編『考える力を高める体験学習』玉川大学出版部 2007 年